



2022.7

vol.232

OTANIing

大谷の「今」を伝える。「未来」へ繋げる!

O-CAST



つながる力

学校長 飯山 等

言葉の獲得は世界を拓げ、経験を推し進める力となります。成長に目を見張る孫に会う度にその思いを強くします。翻って、長く年月を重ねた私には、その反面のすがたを持つこと

にも心が疼くことです。獲得した言葉によって、世界はクリアになったけれど、その言葉が切り落としていく世界の、たいせつな相があることに思いを致さざるを得ないこともしばしばです。同じように「見る」「聞く」「嗅ぐ」「触れる」「味わう」、それらのことについて、見えていないこと、聞けていないこと、味わえていないままだにやり過ぎてしまっていることに心が痛みます。本当に出会い得ていない、出会い得ていないままに、さも為し得ているように見なしてしまっている。知り得ていない今であり、そして、これまでであり、これからであると切実に思います。

昨年、新しい歴史の原点を刻したOSFが、今年はスポーツの種目にもいっそうの工夫をし、文化系クラブを中心とした発表や展示を充実し、加えてこの今熊野キャンパスに集う二千余名の大谷中学生と高校生が一つとなつてのイベントとして、『O-CAST』と命名されて6月9日に開催されました。まさに《大谷われら》の躍動した一日でした。校歌にある、♪これぞ学び舎ああたのし♪(1番)の《大谷》、そして♪これぞ友だちああゆかし♪(2番)の《われら》の力強い前進、深化として受けとめたいと思います。

ところで歌詞にある「どち」は「だち」の文語表現で、現在のわたしたちは日常使うことはありません。『新明解国語辞典』には「雅語。日常のくだけた会話や文章には常用されず、短歌・俳句などの詩的表現や文語文に多く用いられる和語」と説明があります。『広辞苑』によれば、「仲間」「友だち」を意味する「名詞」、また同類のものをまとめていう「たち」「ども」「どうし」として使われる「接尾語」、出典を日本書紀にまで遡ることができる古語と説明があります。1964年、創立90周年を機に大谷の校歌が新しく創られる時に、文語の格調に相応しい語として選ばれた表現であったのです。

この「たち」「だち」は、漢字表記では「私達」「友達」と「達」の字を用います。この「達」の字は何を意味しているのでしょうか。

「達」は「辵(シユウ)」と「土」と「羊」でできています。「土」の部分^{たつ}はもともと「大」で「羊」と合わせた「𠂔」字の変形で、「大」は牝羊の腰の形、牝羊から子羊が生まれ落ちる姿の字が「𠂔」。子羊が勢いよく滑るように生まれる「𠂔」に、道を行く意味の「辵(シユウ)」を加え、『滞りなく行く』ことを「達」の字で表すこととなったと字書は説明しています。達成・達意・達人などの熟語はその意を十分に表していることです。

では「私達」「友達」の語はどのように説明できるでしょうか。字書にはこのように「人の複数を示すのに用いる接尾語」として「達」を用いるのは「日本的用法」と説明してあります。推測ですが、漢字がなかった日本で「ともだち」「わたしたち」を漢字で表そうとしたときに、音が近接しているという理由で「達」の字が選ばれたということなのでしょうか。そうして使われることによって、新たに発生した意味用法としての「人の複数を示す接尾語」なのということなのでしょうか。しかし私には何かひどく瘦せた説明に思えてなりません。と同時に、だからわたしたちが「私達」という存在を間違ってしまうんだ、瘦せさせてしまっているんだというやるせない気持ちです。

「達」の字は栄達・達筆・達者などの熟語も示しているように、「のびやかにすすむ」の意味の字です。「私達」の「達」にもそのような「のびやかにすすむ」の意味はないのでしょうか。単に複数を表すための字ではなく、「私」にはたらきかけ、「私」をのびやかにすすませるといった積極的な作用はないのかと、あえて考えてみたいのです。「達」から「私」を考える。そのように「私達」が見直され、生きられたとき、わたしは個々ばらばらな私として在るのではなく、「達」のはたらきを受け、「達」と一体の、のびやかな私としてあることが開かれるのではないのでしょうか。

(さらに言えば、「私」という漢字を一人称単数として使うのは日本における用法で、もともとは「公」に対する「私」を意味します。漢字の成り立ちも、「私」は実り＝「禾」を抱え込む＝「厶」という字形で、「公」という字は、抱え込む＝「厶」あり方を、解放する＝「八」と組み合わせた形であると言われています。「私」は、滅私奉公・私利私欲など、「公」に対する概念として、否定的意味合いを纏った字だというのですが、これを考えるのは別の機会にしましょう)。